

## 道徳教育における家庭と学校の連携

### —保護者アンケート調査からの検討—

木崎 ちのぶ\*

Cooperation Between Home and School in Moral Education :  
A Study from the Parents' Questionnaire Survey

In addition to increasingly diverse and complex values and an aging population with fewer children, families are becoming smaller. How are these changes manifesting themselves in moral education at home? The purpose of this study was to examine the nature of cooperation between families and schools in moral education, based on a survey of parents of elementary and junior high school students, and to obtain suggestions on how schools can support and complement moral education at home. The survey revealed the following three points. Parents tend to repeat past discipline received at home. There is a disconnect between the information sought by parents and the information provided by the school. Parents think that the content of school moral instruction should be acquired both at home and at school. The above results were discussed and the following recommendations were made. A place and system should be created between the home and school where information and consultation can be exchanged on children's moral education. Parents should share more about their children's development through moral education classes and teaching materials. And so on.

#### I 問題の所在

現代は、価値観が多様化・複雑化し、少子高齢化が進んでいる。さらに、家庭では一世帯当たりの人員数が減少し、「家族の小規模化<sup>1</sup>」が進んでいる。世帯構造と状況について1986年と2022年を比較すると、世帯数が3754万世帯から5431万世帯へと増加、平均世帯人員が3.22人から2.39人へと減少、世帯構造別「児童・生徒（18歳未満の未婚の子）のいる世帯の割合」が46%から18%へと減少、その内訳の核家族は70%から84%へ増加した<sup>2</sup>。家庭構造の変化から、家庭で道徳教育に関わる人が親に限定されつつあることがみてとれる。家庭の変化が家庭における道徳教育にどのように現れているか、家庭の実態を明らかにする必要があると考える。

さらに教育基本法第十条とこども基本法第三条の五では、子の教育（子どもの養育）について父母その他の保護者が第一義的責任を有し、心身共に育成することをあげている。河合（2002）は「道徳教育の根本は家庭にある<sup>3</sup>」と早くから主張し、竹内（2021）も「人間教育の基盤が家庭にあることは今も昔も変わらない<sup>4</sup>」と述べている。法制的にも施設的にも家庭における子どもの道徳性の育成が重視されている。保護者は道徳教育をどう認識し、家庭で自分の子どもにどう道徳教育をしているだろうか。実態を明らかにし、家庭での道徳教育の在り方とそれに対応した支援策を考察する必要がある。

その一方、学校における道徳教育について文部科学省は、道徳教育の抜本的改善・充実を掲げ「特別の教科 道徳」を新設し、学校、家庭、地域が連携した道徳教育の実現に取り組んでいる。学校と家庭、地域の連携が特に強調され始めたの

\* 昭和女子大学現代教育研究所 研究員

は、1995年4月に文部大臣が第15期中央教育審議会に「二十一世紀を展望した我が国の教育の在り方」について検討を求めてからである。答申では、第2部において「学校・家庭・地域社会の役割と連携の在り方」が詳しく述べられている。その当時から伊藤（1996）は「連携は、双方向において行なわれること<sup>5</sup>」が大切であり、その効果は「学校中心の視点では出て来ない」と述べ、竹内（1996）は連携の「実態は決してうまくいっているとは言えない状況<sup>6</sup>」だと述べている。

CiNiiを用い、2000年から2023年の期間で家庭と学校の道徳教育連携に関わる論文を検索した。キーワードは、道徳、連携、家庭、学校、道徳性、道徳教育、保護者、とし4語または3語の組合せで検索したところ、重複を除き60件該当した。論文の内容は、学校視点からの連携の考察が多く、連携するための資料や教材開発、保護者が関わる授業の検討と実践例など、学校・教員側から提供するより良い連携の方策についての道徳教育研究がほとんどであった。他方、保護者の意識調査などを取り入れた保護者の視点を中心とした論文は2件に過ぎなかった。道徳教育における連携について、保護者の視点や実態を踏まえた具体的な連携についての再検討や研究が求められている。

なお、家庭と学校の道徳教育の連携においては道徳性の発達を考慮することが大切である。ホフマン（2001）は、個人的欲求と社会的義務が葛藤するなかで、道徳的内面化が進んでいく<sup>7</sup>と捉えている。さらにコールバーグ（1987）は、「グループや制度への参加<sup>8</sup>」による「役割取得の機会<sup>9</sup>」が多様化することを通して道徳性が発達すると述べている。

以上を踏まえて、家庭と学校の連携の在り方を研究することが必要だと考える。

## II 研究の目的

家庭の道徳教育の充実を図るために、家庭における道徳教育の実態を基にして、家庭と学校との間でどのような連携が求められるかを保護者への

質問紙調査をもとに考察し、示唆を得ることを目的とする。

本研究を進めるにあたって、研究テーマに関わる用語について確認しておく。連携とは、家庭と学校が互いに連絡を取りながらそれぞれの特徴を生かして協力し、双方向で働きかけ、子どもの道徳教育に取り組むことと捉える。

文部科学省は学習指導要領で、道徳教育の目標を「自己（人間として）の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと<sup>10</sup>」（カッコ内は中学校）としている。道徳性については学習指導要領解説の中で「人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり、（道徳教育は）道徳性を構成する諸様相である道徳的判断力、道徳的信条、道徳的実践意欲と態度を養うこと<sup>11</sup>」（カッコ内は小学校のみ）としている。本研究では、道徳教育ならびに道徳性に関しては、学校現場が依拠する文部科学省の示す学習指導要領及び学習指導要領解説の捉え方を踏襲して検証を進めていくこととする。

学校における道徳教育は「特別の教科 道徳」を要として、学習指導要領に則って、学校全体で取り組まれるものであり、家庭における道徳教育は、「親の生活態度や生き方が反映する道徳への無意図的な関わりと意図的な関わり、つまりしつけからなる<sup>12</sup>」私教育であると位置付ける。本研究では、特に家庭における道徳教育のうち意図的な関わりであるしつけを取り上げ、調査し分析する。

以上を確認し、本研究は、道徳教育における家庭と学校の実践上の特徴を踏まえて、学校が家庭の道徳教育を支援・補完する連携について、小・中学生保護者を対象に質問紙調査を実施し考察する。

リサーチクエスチョンは、次の4点である。①家庭における意図的な関わりである子どもへのしつけの実態（しつけの内容と考え、接し方、発達に即した特徴）はどうか、②学習指導要領に記載

されている道徳の内容について保護者は子どもがどこで身につけるべきと考えているか、③学校が提供する道徳教育の具体的な連携の方策や取り組み等について保護者の認識や考え方、態度、関わりはどうか、④これから家庭と学校の連携の仕方について保護者は何を望んでいるか、である。

### III 研究の方法

#### 1. 調査方法

家庭における道徳教育の主な担い手である保護者を対象に質問紙調査を実施した。なお本研究は、武庫川女子大学倫理審査会の審査で承認を得て質問紙調査を実施している（承認番号1808-MWUIE-A-006）。

#### (1) 調査対象

東京都内公立小学校2校・中学校5校（計7校）の小学1年生から中学3年生の保護者を対象とした。元小学校校長から前に勤めていた小学校を中心にA区立小学校数校を紹介してもらい、同様に、現職の中学校校長や元中学校校長から協力候補の中学校を紹介してもらい、研究趣旨に同意いただいた学校で質問紙調査を実施した。依頼校の校長には、質問紙の内容や文言について事前に確認してもらい、保護者への協力依頼を校長名で出してもらった。

2,175件の保護者家庭に配布し、1,153件の回答

を得た。回収率は53%であった。内訳は、小学校は2校で配布796件、回答445件、回収率56%、中学校は5校で配布1,379件、回答708件、回収率51%であった。回収率はやや小学校の方が高かった。中学校の回収率が低くなることを予想して中学校の実施校数を多くし、回収期間を長く設定したため、全体の回答数では、中学校の回答数の方が多くなった。無回答については分析時に一部除外した。そのため、設問ごとに回答数が異なった。

#### (2) 調査手続き

2018年9月から2019年3月まで順次実施した。各校に協力依頼し、児童・生徒を通して家庭に「調査協力のお願い」と「アンケート調査用紙」を配布し、学級担任に回収してもらった。小学校の回収期間は2週間としたが、中学校は回収率を上げるために校長のご配慮から4週間の回収期間とした。調査結果についてはSPSS Statistics ver.28.0.1.0(142)による統計分析を用いた。

#### 2. 結果と考察

属性について、学校種別で保護者の年齢、子どもとの関係、雇用形態の割合を表1に示した。回答者は母親が91%と多く、79%が就業（正規職または臨時）しながら子育てする状況であった。子どもの学年（兄弟姉妹を含む複数回答あり）は、小学1年100名、2年117名、3年72名、4年62名、

表1 年齢・子どもとの関係（性別）・職業（雇用形態）

属性	区分	小学校	中学校	全体
年齢 (N=1143)	30歳未満	4 (1%)	0 (0%)	4 (0%)
	30-35歳未満	38 (9%)	8 (1%)	46 (4%)
	35-40歳未満	89 (20%)	59 (8%)	148 (13%)
	40-45歳未満	186 (42%)	244 (35%)	430 (38%)
	45歳以上	125 (28%)	390 (56%)	515 (45%)
子どもとの関係（性別）(N=1142)	母親（女性）	404 (91%)	635 (91%)	1039 (91%)
	父親（男性）	38 (9%)	65 (9%)	103 (9%)
職業（雇用形態）(N=1132)	正規職	187 (43%)	273 (39%)	460 (41%)
	臨時パートアルバイト	122 (28%)	307 (44%)	429 (38%)
	就業していない	122 (28%)	121 (17%)	243 (21%)

年齢  $\chi^2=121.37$ , df=4,  $p<.001$

5年96名、6年73名、中学1年280名、中学2年240名、中学3年185名であった。小学生39%、中学生61%であった。

### (1) しつけ(子どもへの意図的な関わり)の実態

#### 1) しつけの方針の決定者

しつけの方針の決定者について、保護者の男女別の結果を図1に示した。全体では、母親が45%で一番、次に家族で話し合いが33%であったが、保護者の男女別でみると、女性の保護者では母親と回答した割合が47%で最も多かった。男性の保護者では家族で話し合いと回答した割合が48%で最も多く、次いで父親と回答した割合が23%であった。

また、しつけの方針の決定者について、発達に即した特徴があるか3回答に絞り学年別に比較した(図2)。小学1-3年は家族で話し合う家庭が最も多く(44%)、小学4-6年以上は母親の割合が増えた。父親の割合は、母親より小さいが、中学1年との比較では中学2年で7%、中学3年で

9%増えた。つまり、小学1-3年のうちには家族で話し合ってしつけの方針を決めているが、子どもが小学4-6年以上になると母親が中心となる傾向にあった。また、父親の割合が中学2年では19%、中学3年では21%であったことから、進路決定や将来にむけて父親の助言がしつけに反映されていることが推測できる。

#### 2) しつけで一番大切にしていること

しつけで一番大切にしていることについて保護者の男女別結果を図3に示した。

全体では、善悪の判断29%、思いやりの心21%、生活習慣19%の順であった。保護者の男女別にみると、男性の保護者は「生活習慣」が「善悪の判断」と同じく25%で、女性の保護者との間に有意な差があった。

また、しつけで一番大切にしていることについて、発達に即した特徴があるか学年別に比較した(図4)。学年別の「善悪の判断」の割合は、小学1-3年と中学2年が31%で一番多かった。また、

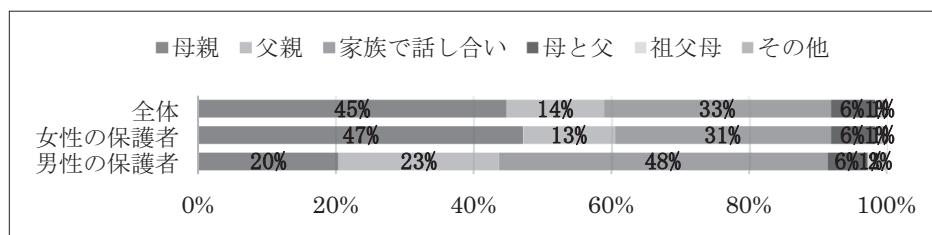


図1 しつけの方針の決定者(男女別) N=1127

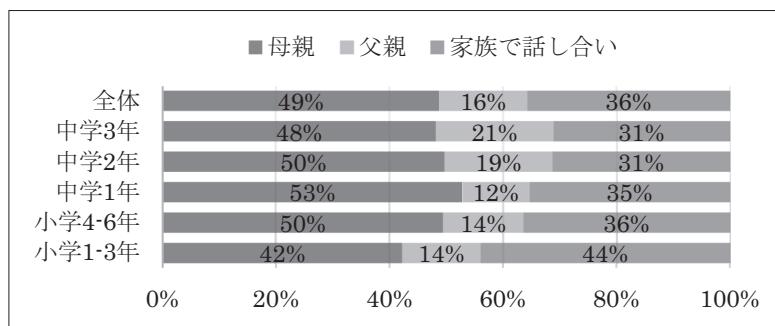


図2 しつけの方針の決定者(学年別) N=1032

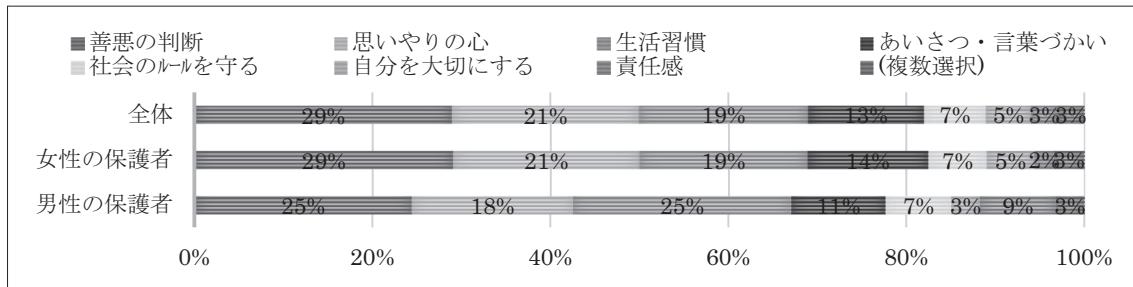


図3 しつけで一番大切にしていること (男女別) N=993

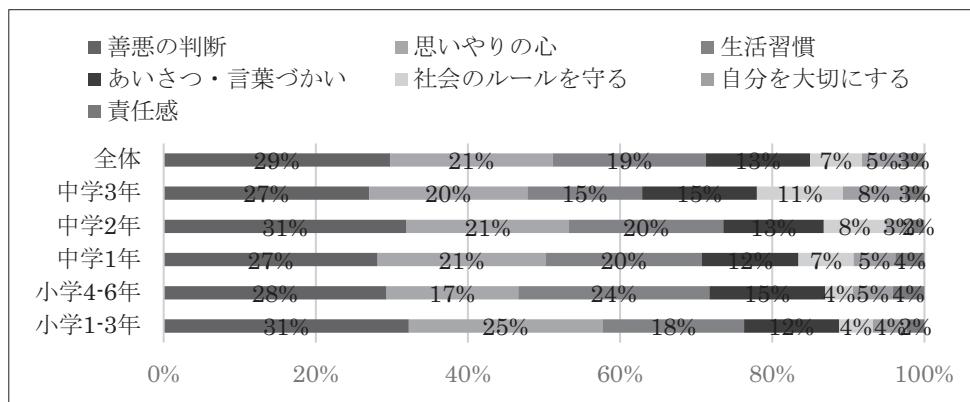


図4 しつけで一番大切にしていること (学年別) N=959

「思いやりの心」の割合は、小学1-3年が25%で最も多かったが、上位学年になるほど少ない傾向であった。「生活習慣」の割合は、小学4-6年の24%が最も多いが、「思いやりの心」と同様に上位学年になるほど少ない傾向であった。小学4-6年の保護者は、「生活習慣」を重視しており、他学年の中で唯一、「思いやりの心」の割合を上回った。「生活習慣」の重視は、小学4-6年と中学3年との間で、9%の差があった。中学3年の特徴として、「社会のルールを守る」「自分を大切にする」が他の学年と比べて多かった。

どの学年においても保護者は「善悪の判断」を最重視していた。道徳教育の面から捉えると、道徳的正しさの判断思考や判断過程を教えたい保護者が多いことを示していた。小学4-6年では「生活習慣」を2番目に重視するのが特徴で、保護者が道徳的行動・習慣をこの小学4-6年の時

期に身につけてほしいと考える傾向がうかがえた。小学生高学年から中学生前半の少年期は、集団生活が始まり自律の道徳へ発達する時期である。中学3年においては、生活習慣がすでに身についている時期と解釈できる。中学3年は「社会のルールを守ること」や「あいさつ・言葉づかい」などが他の学年と比べてみても高い割合でみられることから、社会人としての道徳的行動を期待する時期と推測できる。

### 3) しつけを行う時必要なこと

「家庭で教育やしつけを行う時、必要なことは何だと思うか」について、10の選択肢から3つまで複数回答を求めた(図5)。その結果、「親子の信頼関係がある」29%、「親子で向き合う時間がある」21%、「親子で話し合いをする」20%の順であり、3位までの親子関係で70%となつた。4

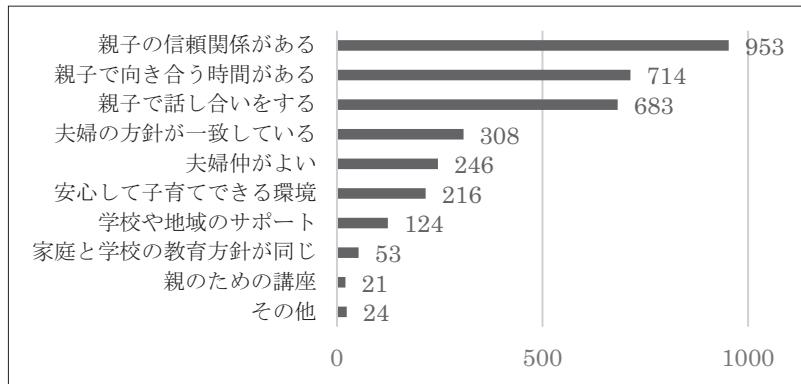


図5 家庭で教育やしつけで必要なこと（3択）

・5位は「夫婦の方針が一致している」9%、「夫婦仲がよい」7%となった。サポートや支援、環境より、親子関係や家族構成メンバーを重視していた。

#### 4) 保護者の姿勢に影響を及ぼした人

自己形成に影響を受けた人物（図6）は、全体では母親が54%で最多だった。男女別に見ると、男性の保護者では、自分の父親から影響を受けたとする人が30%で、母親から影響を受けたとする人が29%でほぼ同数であったが、女性の保護者で

は、自分の母親から影響を受けたとする人が57%であり、父親から影響を受けたとする人は15%であった。男性の保護者は、自分の父親、母親からほぼ同じ程度影響を受けたと認識しているが、女性は同性の親から大きく影響を受けたと認識している傾向が顕著にみられた。

#### 5) 自分が受けた親からの教育の影響

「自分が受けた親からの教育を同じように行っていると思うことがあるか」を4段階で尋ねると（図7）、「よくある」18%と「ときどきある」56%

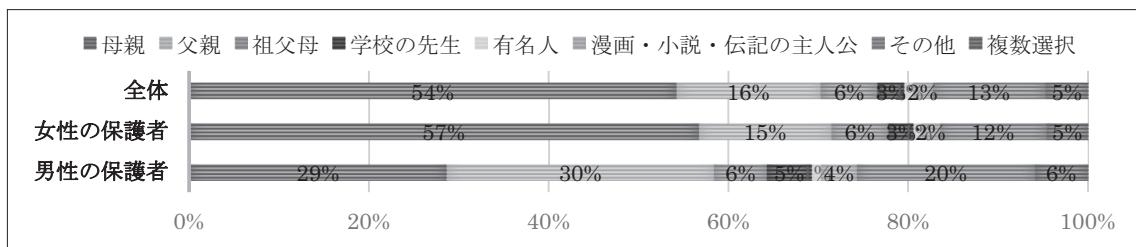


図6 自己形成において一番影響を受けた人 N=1116

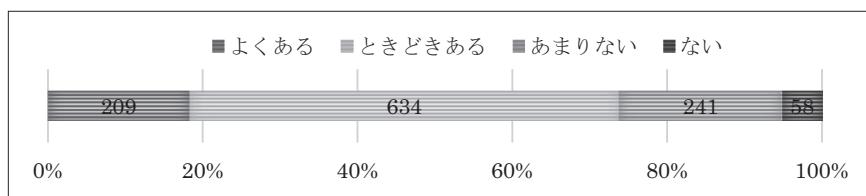


図7 親からの教育を同じように行っていると思うことがあるか N=1142

で計74%となつた。保護者は、自分が受けた教育を同じように子どもに対して行つてゐることがみてとれる。柴野（1995）は「しつけは、しつけ手ないし社会化エージェントが、ことさらしつけ方法を習得したうえで、しつけ行為を行つてゐるものでなく、われわれは、間主観的な生活世界における実際的、日常的知識に準拠して当然のこととして振る舞う<sup>13</sup>」と述べてゐる。本調査でも、自分が受けた教育・しつけを同じように繰り返す傾向にあつた。

## 6) 思春期の特徴と道徳教育の悩み

連携について自由記述を求めたところ（回答201件：中学生保護者110件・小学生保護者91件）、「中3男子ともなると学校と家庭では別人格で過ごしている。学校行事や参観に参加するが、子どもはとても嫌がる。そのため学校でどう過ごしているかを知ることができない」、「子が家庭で話さない」、「学校の様子が分からぬ」等、主に中学生保護者が述べ、情報交換を望む声があつた（表2）。自分の子どもから学校や子ども自身の情報を得ることができない保護者の実態があり、学校での様子・子どもの情報を、学校から提供・共有してもらいたいと考えていた。

## （2）各道徳内容についてどこで身につけると考えるか

学習指導要領に示されている道徳教育の内容項目は、「A主として自分自身に関すること」「B主として人との関わりに関すること」「C主として集団や社会との関わりに関すること」「D主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関するこ」との4つの視点<sup>14</sup>からそれぞれに示されている。この内容項目から20項目を選び、主にどこで身につけるべきか、家庭から学校まで5段階で回答してもらった。評価段階は「1家庭で身につけるべきだと思う」「2どちらかといえば家庭で身につけるべきだと思う」「3家庭と学校の両方で身につけるべきだと思う」「4どちらかといえば学校で身につけるべきだと思う」「5学校で身につけるべきだと思う」とした。

まず、「A主として自分自身に関すること」に含まれる内容項目（表3-1のア-エ）の「ア生活習慣を身につける」では「家庭」が54%、「どちらかといえば家庭」が22%で、76%が家庭を中心と考えていた。「学校」の回答は0%であった。「イ責任ある行動をとる」「ウ善悪を判断し善い行動を行う」「エあいさつ・言葉づかいを大切にする」では、「家庭と学校の両方」と考える場合が

表2 自由記述欄より

id	校種	自由記述欄
189	中	良いアイデアはないですが、学校の様子を子ども（男子）は話さないので、何かあれば先生から連絡が欲しい。
219	中	都合の悪い事は親に話さない子どもなので、宿題・提出物・忘れ物他の情報について、特筆するべき事がある時だけ良いので、メール等を利用して連絡をしていただける様なシステムがあればと思います。
335	中	中3男子ともなると学校と家庭では別人格で過ごしている。学校行事、参観にはほとんど参加するが、とても嫌な顔をする。また学校の事は全く話してくれない。そのため学校で何をやってどう過ごしているかを知る事ができない。知らうと思うと先生の手を煩わせてしまう。常に同調させるのではなく、学期ごとの面談等で開いた部分を埋めながらという感じで良いと思う。
493	中	思春期になるにつれて、少しずつ学校の話をしなくなり、学校の様子が見てこない。賞をとったとか、そんな大きな話ではなく、問題があるとき以外にも、何かしら係る機会や連絡が取れる機会があるとありがたい。
533	中	保護者として参加したいが子どもが嫌がります。お年頃なのかと思います。特に男子は、母の参加が嫌なようです。
550	中	親子で向き合う時間や会話はとても大切ですが、中学生になると反対期などでどうしても難しくなってくるので、学校のサポートは必須、先生との信頼関係を築きやすい環境、先生に協力する家庭の体制作りができるたらいいと思います。学校だけに任せない、先生の相談にものれるくらいの協力体制。
570	中	学校では学校の、家庭は家庭の、教える範囲があるから、一緒にやるのは難しいのでは。連携する活動を道徳教育というのはちょっと違うような。特に思春期の子どもの親として参加するのは難しい。むしろ、地域の一人として参加するなら協力もできるが。道徳の授業に参加して、家で子どもを含め話し合うのはとても意味があることは思います。
627	中	中学生になると親が関わることを嫌がり、友達の前ではわざと悪い態度をとったりするので、連携するとしたら、裏方的な感じで協力できればと思います。

一番多く、「家庭」の回答は14%—23%ほどで、「学校」の回答は1%未満だった。内容項目に対する保護者の考えを学校種別で比較するために、5段階的回答を間隔尺度として扱った上で、対応のないt検定を行った。その結果、「ウ善悪を判断し善い事を行う」の項目について、有意差が認められた ( $t(988)=2.25, p<.01$ )。中学生保護者 ( $M=2.40$ ) の方が小学生保護者 ( $M=2.53$ ) よりも家庭で身につけるべきだと考えていた。他の項目では有意差は見られなかった。

次に「B主として人との関わりに関する事」に含まれる内容項目（表3-2のオーケー）では、4項目とも、「家庭と学校の両方」と考える家庭が50%を超えた。「才思いやりの心を持ち親切にする」「キ年長者を敬う」「ク感謝の気持ちを大切にする」の3項目は、「家庭」の回答は20%程度で、

「学校」の回答は1%未満だった。「カ友情を大切にする」では、「学校」「どちらかと言えば学校」の回答が35%だった。対応のないt検定を行ったところ、「才思いやりの心を持ち親切にする」の項目について、有意差が認められた ( $t(981)=1.99, p<.05$ )。中学生保護者 ( $M=2.44$ ) の方が小学生保護者 ( $M=2.54$ ) よりも家庭で身につけるべきだと考えていた。同様に「キ年長者を敬う」も有意差が認められ ( $t(1108)=2.07, p<.05$ )、中学生保護者 ( $M=2.38$ ) の方が小学生保護者 ( $M=2.49$ ) よりも家庭で身につけるべきだと考えていた。

更に「C主として集団や社会とのかかわりに関する事」の項目（表3-3のスト）の、「ス社会規範を守る」「セ公正公平な心・正義観を持つ」「ソ働くことのよさ」では、「家庭と学校の両方」

表3-1 道徳内容：A主として自分自身に関する事（アーエー）

		1 家庭で身につけるべきだと思う	2 どちらかといえは家庭で身につけるべきだと思う	3 家庭と学校の両方で身につけるべきだと思う	4 どちらかといえは学校で身につけるべきだと思う	5 学校で身につけるべきだと思う	M	SD
△生活習慣を身につける N=1138	小	242 54.6%	91 20.5%	109 24.6%	1 0.2%	0 0%	1.70	0.85
	中	368 52.9%	158 22.7%	166 23.9%	3 0.4%	0 0%	1.72	0.84
	計	610 53.6%	249 21.9%	275 24.2%	4 0.4%	0 0%		
△責任ある行動をとる N=1121	小	57 13.0%	46 10.5%	324 74.1%	9 2.1%	1 0.2%	2.66	0.74
	中	99 14.5%	93 13.6%	473 69.2%	14 2.0%	5 0.7%	2.61	0.78
	計	156 13.9%	139 12.4%	797 71.1%	23 2.1%	6 0.5%		
△善悪を判断し善い事を行う N=1121	小	70 15.9%	74 16.8%	291 66.1%	5 1.1%	0 0%	2.53	0.77
	中	142 20.9%	132 19.4%	400 58.7%	5 0.7%	2 0.3%	2.40	0.83
	計	212 18.9%	206 18.4%	691 61.6%	10 0.9%	2 0.2%		
△あいさつ・言葉づかいを大切にする N=1129	小	95 21.6%	82 18.7%	257 58.5%	3 0.7%	2 0.5%	2.40	0.85
	中	159 23.1%	112 16.3%	398 57.9%	11 1.6%	7 1.0%	2.41	0.89
	計	254 22.6%	194 17.2%	655 58.2%	14 1.2%	9 0.8%		

表3-2 道徳内容：B主として人との関わりに関する事（オーケー）

		1 家庭で身につけるべきだと思う	2 どちらかといえは家庭で身につけるべきだと思う	3 家庭と学校の両方で身につけるべきだと思う	4 どちらかといえは学校で身につけるべきだと思う	5 学校で身につけるべきだと思う	M	SD
△才思いやりの心を持ち親切にする N=1118	小	74 16.9%	58 13.2%	302 68.9%	4 0.9%	0 0%	2.54	0.78
	中	139 20.4%	116 17.1%	413 60.7%	10 1.5%	2 0.3%	2.44	0.84
	計	213 19.1%	174 15.6%	715 64.0%	14 1.3%	2 0.2%		
△カ友情を大切にする N=1129	小	16 3.6%	14 3.2%	249 56.6%	124 28.2%	37 8.4%	3.35	0.82
	中	23 3.3%	16 2.3%	411 59.7%	180 26.1%	59 8.6%	3.34	0.80
	計	39 3.5%	30 2.7%	660 58.5%	304 26.9%	96 8.5%		
△キ年長者を敬う N=1110	小	79 18.1%	92 21.1%	243 55.6%	18 4.1%	5 1.1%	2.49	0.87
	中	155 23.0%	130 19.3%	367 54.5%	19 2.8%	2 0.3%	2.38	0.88
	計	234 21.1%	222 20.0%	610 55.0%	37 3.3%	7 0.6%		
△ク感謝の気持ちを大切にする N=1120	小	89 20.3%	68 15.5%	278 63.3%	4 0.9%	0 0%	2.45	0.82
	中	166 24.4%	114 16.7%	395 58.0%	4 0.6%	2 0.3%	2.36	0.87
	計	255 22.8%	182 16.3%	673 60.1%	8 0.7%	2 0.2%		

が68%—76%であった。「夕家族で協力する」では92%、「チ家の手伝いをする」では93%、「ツ父母（祖父母）を敬愛する」では82%が「家庭」「どちらかと言えば家庭」と答えた。「学校」の回答はほとんどなかった。対応のないt検定を行った結果、「夕家族で協力する」で、有意差が認められた ( $t(896)=1.97$ ,  $p<.05$ )。中学生保護者 ( $M=1.37$ ) の方が小学生保護者 ( $M=1.45$ ) よ

りも家庭で身につけるべきだと考えていた。そして「テ文化や歴史を大切にする」で有意差が認められたが ( $t(1007)=2.44$ ,  $p<.05$ )、小学生保護者 ( $M=3.00$ ) の方が中学生保護者 ( $M=3.10$ ) よりも家庭で身につけるべきと考えていた。

最後に「D主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」に含まれる内容項目（表3-4のケシ）では、4項目とも「家庭と学校の

表3-3 道徳内容：C主として集団や社会との関わりに関する事項（スト）

		1 家庭で身につけるべきだと思う	2どちらかといえば家庭で身につけるべきだと思う	3家庭と学校の両方で身につけるべきだと思う	4どちらかといえば学校で身につけるべきだと思う	5学校で身につけるべきだと思う	M	SD
△社会規範を守る N=1122	小	31 7.1%	27 6.2%	323 73.7%	45 10.3%	12 2.7%	2.95	0.75
	中	50 7.3%	39 5.7%	529 77.3%	54 7.9%	12 1.8%	2.91	0.70
	計	81 7.2%	66 5.9%	852 75.9%	99 8.8%	24 2.1%		
△公正公平な心・正義感を持つ N=1110	小	31 7.1%	30 6.9%	333 76.6%	35 8.0%	6 1.4%	2.90	0.69
	中	56 8.3%	57 8.4%	511 75.7%	46 6.8%	5 0.7%	2.83	0.70
	計	87 7.8%	87 7.8%	844 76.0%	81 7.3%	11 1.0%		
△働くことのよさ N=1106	小	47 10.9%	67 15.5%	288 66.5%	27 6.2%	4 0.9%	2.71	0.78
	中	66 9.8%	99 14.7%	468 69.5%	32 4.8%	8 1.2%	2.73	0.75
	計	113 10.2%	166 15.0%	756 68.4%	59 5.3%	12 1.1%		
△夕家族で協力する N=1105	小	277 64.0%	117 27.0%	39 9.0%	0 0%	0 0%	1.45	0.66
	中	477 71.0%	140 20.8%	55 8.2%	0 0%	0 0%	1.37	0.63
	計	754 68.2%	257 23.3%	94 8.5%	0 0%	0 0%		
△チ家の手伝いをする N=1109	小	296 67.7%	108 24.7%	32 7.3%	0 0%	0 0%	1.42	0.80
	中	493 73.3%	130 19.3%	50 7.4%	0 0%	0 0%	1.34	0.61
	計	789 71.1%	238 21.4%	82 7.4%	0 0%	0 0%		
△父母（祖父母）を敬愛する N=1104	小	248 57.1%	102 23.5%	83 19.1%	0 0%	1 0.2%	1.63	0.80
	中	418 62.4%	139 20.7%	108 16.1%	4 0.6%	1 0.1%	1.55	0.79
	計	666 60%	241 22%	191 17%	4 0%	2 0%		
△文化や歴史を大切にする N=1108	小	14 3.2%	23 5.3%	350 80.5%	43 9.9%	5 1.1%	3.00	0.57
	中	18 2.7%	34 5.1%	512 76.1%	84 12.5%	25 3.7%	3.10	0.65
	計	32 2.9%	57 5.1%	862 77.8%	127 11.5%	30 2.7%		
△郷土愛と愛国心を育てる N=1087	小	23 5.4%	24 5.6%	313 73.1%	59 13.8%	9 2.1%	3.02	0.70
	中	27 4.1%	39 5.9%	485 73.6%	83 12.6%	25 3.8%	3.06	0.71
	計	50 4.6%	63 5.8%	798 73.4%	142 13.1%	34 3.1%		

表3-4 道徳内容：D主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関する事項（ケシ）

		1 家庭で身につけるべきだと思う	2どちらかといえば家庭で身につけるべきだと思う	3家庭と学校の両方で身につけるべきだと思う	4どちらかといえば学校で身につけるべきだと思う	5学校で身につけるべきだと思う	M	SD
△けいのちを大切にする N=1115	小	79 18.0%	53 12.1%	301 68.6%	4 0.9%	2 0.5%	2.54	0.81
	中	134 19.8%	68 10.1%	465 68.8%	5 0.7%	4 0.6%	2.52	0.84
	計	213 19.1%	121 10.9%	766 68.7%	9 0.8%	6 0.5%		
△生きる喜びと自尊心を大切にする N=1116	小	81 18.5%	83 18.9%	269 61.4%	2 0.5%	3 0.7%	2.46	0.82
	中	117 17.3%	92 13.6%	457 67.4%	10 1.5%	2 0.3%	2.54	0.80
	計	198 17.7%	175 15.7%	726 65.1%	12 1.1%	5 0.4%		
△自然環境を大切にする N=1110	小	30 6.9%	30 6.9%	355 81.2%	18 4.1%	4 0.9%	2.85	0.63
	中	59 8.8%	56 8.3%	509 75.6%	45 6.7%	4 0.6%	2.82	0.70
	計	89 8.0%	86 7.7%	864 77.8%	63 5.7%	8 0.7%		
△シ感謝する心を持つ N=1111	小	44 10.1%	55 12.6%	334 76.4%	3 0.7%	1 0.2%	2.68	0.67
	中	73 10.8%	65 9.6%	521 77.3%	15 2.2%	0 0%	2.71	0.68
	計	117 10.5%	120 10.8%	855 77.0%	18 1.6%	1 0.1%		

表4 保護者が考える道徳的価値について

	家庭で身につけるべき	家庭と学校の両方で身につけるべき	学校で身につけるべき
A 主として自分自身に関すること	生活習慣を身につける	責任ある行動をとる 善悪を判断し善い事を行う 挨拶・言葉づかいを大切にする	
B 主として人との関わりに関すること		思いやりの心を持ち親切にする 友情を大切にする 年長者を敬う 感謝の気持ちを大切にする	
C 主として集団や社会との関わりに関すること	家族で協力する 家の手伝いをする 父母（祖父母）を敬愛する	社会規範を守る 公正公平な心・正義観を持つ 働くことのよさ 文化や歴史を大切にする 郷土愛と愛国心を育てる	
D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること		いのちを大切にする 生きる喜びと自尊心を大切にする 自然環境を大切にする 感動する心を持つ	

両方」が一番多くなっていた。「けいのちを大切にする」「生きる喜びと自尊心を大切にする」では、30%超が「家庭」「どちらかと言えば家庭」と回答した。「サ自然環境を大切にする」「シ感動する心を持つ」では77%以上が「家庭と学校の両方」と捉えているが、4項目とも「学校」の回答は1%未満だった。

以上の結果をまとめ、評価段階の1と2を「家庭で身につけるべき」、3を「家庭と学校の両方で身につけるべき」、4と5を「学校で身につけるべき」とし、各項目を一番選択の割合の高いところに位置づけたのが表4である。20項目のうち4項目「生活習慣を身につける」「家族で協力する」「家の手伝いをする」「父母（祖父母）を敬愛する」では、「家庭で身につけるべき」に位置づけられた。他16項目では、「家庭と学校の両方で身につけるべき」に位置づけられた。「学校で身につけるべき」は一つもなかった。保護者は学校の道徳指導内容を家庭及び家庭と学校の両方で身につけるべきだと考えており、道徳的価値について家庭での役割を認識していたといえる。保護者が家庭のしつけで考え望んでいることが「『道徳』の指導要領の中の指導目標として掲げられるものと一致するものが非常に多い<sup>15</sup>」ため、多くの項目で「家庭」、または「家庭と学校で身につける

べき」と捉えたと推測できる。連携において、子どもに身につけてほしい道徳内容について、共通認識を持って取り組むことの必要性が示唆される。

### (3) 学校が提供する道徳教育の連携の方策についての意識

表5-1に学校が提供する家庭との連携の方策について(①-⑤)、保護者の対応・実態を校種別にまとめ、クロス集計で示した。①学校の「道徳教育の計画」について、56%が「あまり知らない」「まったく知らない」と答えた。②道徳の教科書・教材を家庭で読んだり話し合ったりする経験についての質問では、「まったくない」50%、「あまりしていない」39%であった。一方、③学校行事への参加は85%と積極的に行われていた。小学生保護者の方が、中学生保護者よりも積極的に参加する傾向にあり( $\chi^2=36.47$ ,  $df=3$ ,  $p<.001$ )、「いつも参加する」と回答したのは小学生保護者44%で中学生保護者28%であった。④自校のホームページを閲覧したのは、小学生保護者51%で、中学生保護者68%と、中学生保護者の方が17%高かった( $\chi^2=44.33$ ,  $df=3$ ,  $p<.001$ )。⑤道徳の公開授業は、全体では27%が参加していた。小・中で比較すると、小学生保護者41%が中学生保護者18%よりも23%高く「参加」していた( $\chi^2=$

表 5-1 連携の方策について保護者の対応・実態

		1 知っている	2 少し知っている	3 あまり知らない	4 まったく知らない	M
① 学校の「道徳教育の計画」について N=1133	小	56 12.7%	151 34.3%	170 38.6%	63 14.3%	2.55
	中	83 12%	208 30%	297 42.9%	105 15.2%	2.61
	計	139 12.3%	359 31.7%	467 41.2%	168 14.8%	
		1 よくしている	2 ときどきしている	3 あまりしていない	4 まったくしていない	M
② 道徳の教科書・教材を家庭で読んだり話し合ったりしましたか N=1134	小	4 0.9%	34 7.8%	177 40.8%	219 50.5%	3.41
	中	9 1.3%	76 10.9%	262 37.4%	353 50.4%	3.37
	計	13 1.1%	110 9.7%	439 38.7%	572 50.4%	
		1 いつも参加する	2 ときどき参加する	3 あまり参加できない	4 参加できない	M
③ 学校行事への参加 N=1144	小	195 44.0%	198 44.7%	47 10.6%	3 0.7%	1.68
	中	199 28.3%	379 53.9%	99 14.1%	26 3.7%	1.93
	計	394 34.4%	577 50.3%	146 12.7%	29 2.5%	
		1 いつも見る	2 ときどき見る	3 ほとんど見ない	4 まったく見ない	M
④ 自校のホームページ N=1121	小	19 4.3%	207 46.8%	164 37.1%	52 11.8%	2.56
	中	72 10.2%	408 58.0%	188 26.7%	35 5.0%	2.26
	計	91 7.9%	615 53.7%	352 30.7%	87 7.6%	
		1 参観した	2 参観しなかったが時間ががあれば参観したい	3 道徳より他の教科を参観したい	4 道徳の授業はあまり興味ない	M
⑤ 道徳の公開授業について N=1129	小	177 40.7%	179 41.1%	54 12.4%	25 5.7%	
	中	126 18.2%	407 58.6%	91 13.1%	70 10.1%	
	計	303 26.8%	586 51.9%	145 12.8%	95 8.4%	

表 5-2 連携の方策について保護者の関わり方・考え方

		1 ぜひ参加したい	2 参加したい	3 あまり参加したくない	4 参加したくない	
⑥ 保護者が協力する授業でゲストティーチャーとして参加しますか N=1125	小	20 4.6%	95 21.9%	213 49.2%	105 24.2%	
	中	11 1.6%	129 18.6%	372 53.8%	180 26%	
	計	31 2.8%	224 19.9%	585 52%	285 25.3%	
		1 ぜひやってほしい	2 できればやってほしい	3 あまり望まない	4 望まない	
⑦ 地域でも保護者対象の道徳授業をして欲しいですか N=1121	小	27 6.2%	169 38.9%	170 39.1%	69 15.9%	
	中	37 5.4%	253 36.8%	290 42.1%	108 15.7%	
	計	64 5.7%	422 37.6%	460 40.9%	177 15.7%	
		1 ぜひしたい	2 時間があればしたい	3 あまり必要ない	4 まったく必要ない	
⑧ 定期的に学校の先生と子どもについての意見交換をしたいですか N=1139	小	118 26.9%	286 65.1%	31 7.1%	4 0.9%	
	中	128 18.3%	495 70.7%	69 9.9%	8 1.1%	
	計	246 21.6%	781 68.6%	100 8.8%	12 1.1%	
		1 ぜひ参加したい	2 内容による	3 道徳より他の教科を参観したい	4 参加したくない	
⑨ 子育て教育にかかわる講習会 N=1133	小	50 11.4%	234 53.2%	128 29.1%	28 6.4%	
	中	56 8.1%	375 54.1%	188 27.1%	74 10.7%	
	計	106 9.4%	609 53.8%	316 27.9%	102 9.0%	

72.45, df=3, p<.001)。

次に学校が提供する連携の方策に対する保護者の関わり方と考えについて(表 5-2 の⑥-⑨)、回答 4段階を校種別のクロス集計で確認した。⑥保護者が協力する授業でのゲストティーチャーは、「あまり参加したくない」「参加したくない」が77%であった。⑦地域における保護者対象の道徳授業は、「あまり望まない」「望まない」が57%であった。⑧定期的に学校の先生と子どもについての意見交換は、「ぜひしたい」「時間があればしたい」が90%であった。⑨子育て教育にかかわる講習会

への参加は、54%は「内容による」と考え、28%は「時間があれば参加したい」と考えていた。これらの保護者の関わり方と考えには校種別の有意な違いは見られなかった。

また、学校が保護者と連携をはかる具体的な運動や活動について(表 5-3 の⑩-⑭)、それに対する保護者の重要性の尺度回答「大切」から「大切ではない」までの4段階を校種別のクロス集計で確認した。⑩あいさつ運動、⑪生活習慣を身につける運動、⑫環境美化運動、⑬職場見学活動については、校種に関係なく、約95%以上の保護者

表 5-3 連携の活動について保護者の大切さの認識

		1 大切と思う	2 まあ大切だと思う	3 あまり大切ではない	4 大切ではない	M
⑩ あいさつ運動 N=1143	小	286 64.7%	135 30.5%	17 3.8%	4 0.9%	1.41
	中	492 70.2%	182 26.0%	19 2.7%	8 1.1%	1.35
	計	778 68.1%	317 27.7%	36 3.1%	12 1.0%	
⑪ 生活習慣を身につける運動（そうじ・給食マナー）N=1143	小	395 89.4%	45 10.2%	1 0.2%	1 0.2%	1.11
	中	589 84.0%	104 14.8%	5 0.7%	3 0.7%	1.18
	計	984 86.1%	149 13.0%	6 0.5%	4 0.3%	
⑫ 環境美化運動（地域の清掃・美化環境づくり）N=1141	小	347 78.7%	89 20.2%	4 0.9%	1 0.2%	1.23
	中	503 71.9%	191 27.3%	5 0.7%	1 0.1%	1.29
	計	850 74.5%	280 24.5%	9 0.8%	2 0.2%	
⑬ 職場見学活動 N=1143	小	309 69.9%	118 26.7%	13 2.9%	2 0.5%	1.34
	中	518 73.9%	167 23.8%	16 2.3%	0 0.0%	1.30
	計	827 72.4%	285 24.9%	29 2.5%	2 0.2%	
⑭ 親子宿泊体験活動 N=1121	小	92 21.2%	174 40.2%	140 32.3%	27 6.2%	2.24
	中	82 11.9%	261 37.9%	276 40.1%	69 10.0%	2.50
	計	174 15.5%	435 38.8%	416 37.1%	96 8.6%	

表 5-4 連携の活動について保護者の関わり方・考え方

		1 保護者として参加・居りしたい	2 必要だが参加・協力できない	3 保護者と関係なく学校を中心やってほしい	4 その他
⑮ あいさつ運動を行うとしたら N=1120	小	170 39.2%	136 31.3%	108 24.8%	20 5%
	中	240 35.0%	231 33.7%	189 27.6%	26 4%
	計	410 36.6%	367 32.7%	297 26.5%	46 4%
⑯ 生活習慣を身につける運動を行うとしたら（掃除・給食のマナー）N=1124	小	164 37.9%	131 30.3%	115 26.6%	23 5%
	中	228 33.0%	259 37.5%	180 26.0%	24 4%
	計	392 34.9%	390 34.7%	295 26.2%	47 4%
⑰ 環境美化運動の推進について（地域と学校）N=1124	小	181 41.8%	136 31.4%	99 22.9%	17 4%
	中	264 38.2%	241 34.9%	169 24.5%	17 2.5%
	計	445 40%	377 34%	268 24%	34 3%
⑱ 職場見学活動があるとしたら N=1122	小	168 39.1%	128 29.8%	124 28.8%	10 2.3%
	中	239 34.5%	203 29.3%	234 33.8%	16 2.3%
	計	407 36.3%	331 29.5%	358 31.9%	26 2.3%
⑲ 学校で親子宿泊体験学習があるとしたら N=1109	小	159 36.9%	112 26.0%	132 30.6%	28 6.5%
	中	145 21.4%	216 31.9%	269 39.7%	48 7.1%
	計	304 27.4%	328 29.6%	401 36.2%	76 6.9%

は「大切だと思う」「まあ大切だと思う」と考えていた。しかし、⑭親子宿泊体験学習(N=1121)の大切さについては、肯定的と否定的な回答がほぼ半数ずつとなり、中学生保護者よりも小学生保護者の方が大切だと考える傾向があった( $\chi^2=24.69, df=4, p<.001$ )。

同様に連携の活動について（表 5-4 の⑮-⑯）、保護者の関わり方と主体的協力の意思を 4 選択肢「参加・協力したい」「必要だが協力できない」「学校を中心にやってほしい」「その他」で尋ね、校種別クロス集計で確認した。⑮あいさつ運動・⑯生活習慣を身につける運動・⑰環境美化運動への協力には、35%—40%が「参加・協力したい」だった。⑯生活習慣を身につける運動では、「参

加・協力したい」が小学生保護者38%でやや高い一方、「必要だが協力できない」が中学生保護者38%でやや高かった( $\chi^2=8.00, df=3, p<.05$ )。また、⑱職場見学活動（保護者の職場を見学し働くことのよさを知るなど）、⑲親子宿泊体験学習については、37%—39%の小学生保護者が協力したいと考えていたが、中学生保護者では低かった（⑲ $\chi^2=32.28, df=3, p<.001$ ）。これら⑮-⑯の連携する活動について、「その他」には「運動をしなくても当然家庭で取り組んで行うべき」「学校と家庭それぞれで行えばよい」「内容次第」「都合次第」の記述があった。

以上の結果から、連携の活動に関して、保護者は連携の重要性を認識していたが、「参加・協力

表6 自由記述による意見

カテゴリー	記述内容	カテゴリー	記述内容		
①連絡・情報について (77件：中42、小35)	インターネット、メールを活用して情報共有したい 情報公開、授業公開、HP等で学校から情報を発信してほしい 面談・意見交換会を増やしてほしい 連絡帳（小学校）の中学校版があるとよい（中） 連絡帳をもっと活用してほしい（小） 連絡帳も大事だが、SNSを活用してほしい（小） 子が学校の様子を親に話さない（中） 子の状況を共通理解したい 学校と保護者で教育目標を共有し、同じ方向性で子を育てたい（小）	③問題点について (37件：中24、小13)	平日の授業公開や保護者会の参加が困難（土日や夜にしてほしい） 学校と家庭の教育方針をすり合わせるべき 教師は人間性を兼ね備える必要がある 基本として家庭内のしつけをしっかりと行うべき 思春期の子が親の参加を嫌がる 家庭・保護者がもっと協力的になるべき 親が子の教育の仕方を分からぬのではないか（小） 家庭と学校の信頼関係が築けていない（小）		
②改善方法について (55件：中32、小23)	学校・親だけでなく地域や社会のかかわりがもっと必要 学校・家庭・地域の連携がもっと必要 時間がなく、教師と親の連携が難しくなってきている 教師の負担をこれ以上増やしたくない 学校と保護者の信頼関係が必要 学校・家庭・第三者（仲介的役割）の三角形の構築 授業について子どもが家庭で話すことで共有する、連携が可能（小） 地域からの学校サポートがあるとよい（小）	④企画・イベントの提案 (20件：中8、小13)	ボランティア活動の活用 親子共同参加の公開授業 面談以外の電話相談室（親のための） 親のための講座 授業に親が参加する学校ボランティア 学校から親子への宿題を出す	⑤学校行事 (8件：中3、小5)	地域に開かれた学校づくりをしてほしい 学校公開や保護者会を土曜日や夜に行ってほしい PTA活動を充実させてほしい

できない」「学校を中心にやってほしい」等、積極的に連携活動に対応できないというずれが確認できた。また、保護者は自分の子どもについて、学校・教員と情報共有したいと希望していることも明らかになった。

#### （4）これからの家庭と学校の連携の仕方について

これからの家庭と学校の連携の仕方について自由記述を求め、201件の回答を得た。内容を精査し、5つのカテゴリー①連絡・情報、②改善方法、③問題点、④企画・イベントの提案、⑤学校行事について、に分類した。具体的な内容と件数を表6に示した。

連絡・方法については「SNSを活用して情報共有したい」という意見が最多で、特に「子」に関して直接データを受信したいと保護者は述べていた。「メールを活用したい」「意見交換をしたい」「情報が欲しい」という声も多く、具体的なツール・方法についての記述は様々だが、「連絡帳をもっと活用したい」（17件）という意見も多くあった。校種別比較では、思春期の特徴で上述した通り、中学生保護者が、子どもが話さないため様子が分からず情報が欲しいと回答した。小学生保護者も情報を共有したいと回答している点においては共通していた。これは先に木崎（2019）が小学生保

護者対象に行った調査結果と共通していた<sup>16</sup>。

改善方法については、「授業について子どもが家庭で話すことで共有する」「学校・家庭・地域の連携がもっと必要」だと述べる一方で、「教師の負担をこれ以上増やしたくない」という意見もあった。問題点や改善方法をあげ、連携の難しさについても捉えていた。

保護者が希望する子どもに関する情報をどのように学校と共有していくか、学校はどのように提供していくか、検討が必要である。

#### V まとめと今後の課題

本研究では、小・中学生保護者対象の質問紙によるアンケート調査を行い保護者の実態や意見を明らかにし、家庭と学校が連携する道徳教育について検討し、今後の連携の取り組みへの示唆を得た。

その結果、連携に向けて導き出された特性と課題として、特に次の3点が確認できた。これらは、小・中の校種別分析においても共通している。①保護者は自分が受けた家庭の道徳教育における意図的な関わりであるしつけを同じように子どもに繰り返す傾向があること、②家庭・保護者と学校・教員との間に、情報や連携の認識などの多様なずれがあること、③学校の道徳指導内容を家庭

及び家庭と学校の両方で身につけるべきだと考えていることである。

以上を踏まえて、求められる連携への示唆として、保護者と学校の対応を次の通り指摘できる。

まず保護者の対応として、第1に、保護者は家庭の道徳教育・しつけの重要性を自覚しているため、家庭から学校へと連続しつつ共に道徳教育を行う連携について協働意識を持って臨むことが可能であり、その姿勢が必要となる。第2に、保護者は学校の道徳指導内容を家庭及び家庭と学校の両方で身につけるべきだと考えているため、連携の内容・子どもに身につけてほしい道徳内容を学校と情報共有し共通認識を持って取り組むように心がける。第3に、保護者は家庭の道徳教育の役割を自覚しているが自分が受けた教育と同じように行う傾向がある。自分の子どもを広い視野から教育するためにも、学校と協力体制をつくり、信頼関係を築くようにすることである。

学校の対応としては、第1に、学校は家庭と学校間に子どもの道徳教育についての情報交換と相談の場・体制を確立することである。第2に、学校は道徳授業や教材を活用し、保護者が子どもの成長をもっと共有できるよう工夫することである。第3に、学校は子どもに小・中学生の発達段階に応じた役割取得の機会を与え、未来の親を育てる工夫をすることである。家庭では自分が受けた教育を同じように繰り返す傾向があることから、子どもが親の立場を役割取得できる機会を充実させることが大切だと考える。第4に、学校は保護者と子どもが共に活動や体験する場・機会を多く設定し、家庭の道徳教育に生かしていくようにすることである。加えて第5に、学校は「ネットワーク<sup>17</sup>」の窓口となり、保護者が子育てを支えてくれる人々とつながり、提供されている支援システム・サポート体制等を活用して、家族が小規模化しても孤独感や重責を背負わないよう社会全体で支えることも提案したい。

家庭と学校の道徳教育の連携では、子どもの道徳的成長を互いに共有しながら、それぞれの特徴

を生かして、子どもが体験や思考を深め、自ら道徳性を発達できるように留意する必要がある。

今後の課題としては2点があげられる。第1に、問題を抱えている家庭や支援を必要としている家庭など、その保護者を調査対象に加え、実態と課題を明らかにする必要があると考える。第2に、本調査結果を踏まえて、学校・教員を対象とした調査を行うと共に、本研究の提案を検証し、深める研究が必要だと考える。

## 引用文献・参考文献

- 1 田中理絵編著 (2018)『現代の家庭教育』NHK出版, p.71.
- 2 厚生労働省 (2023)『2022（令和4）年国民生活基礎調査の概況』pp.7-8. <<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/dl/14.pdf>> (2023年9月8日閲覧)
- 3 河合隼雄 (2002)『河合隼雄著作集第II期第2巻心理療法の展開』岩波書店, p.161.
- 4 竹内善一 (2021)「第15章家庭教育と道徳教育」日本道徳教育学会全集編集委員会・田沼茂紀ほか編『新道徳教育全集第5巻道徳教育を充実させる多様な支援—大学、教育委員会、家庭、社会における取組—』学文社, p.133.
- 5 伊藤利明 (1996)「道徳教育の地域・家庭との連携」『道徳と教育』日本道徳教育学会, 41(3/4), pp.38-42.
- 6 竹内善一 (1996)「道徳教育の啓発と家庭・地域社会の連携について」『道徳と教育』日本道徳教育学会, 41(3/4), pp.218-222.
- 7 ホフマンM.L. 菊池章夫・二宮克美訳 (2001)『共感と道徳性の発達心理学』川島書店, pp.148-149.
- 8 コールバーグL. 永野重史監訳 (1987)『道徳性の形成 認知発達的アプローチ』新曜社, pp.74-81.
- 9 同上 p.76.
- 10 文部科学省 (2018a)『小学校学習指導要領（平成29年告示）』東洋館出版社, p.17.

- 文部科学省 (2018b) 『中学校学習指導要領  
(平成29年告示)』東山書房, p.19.
- 11 文部科学省 (2018c) 『小学校学習指導要領  
(平成29年告示) 解説 特別の教科 道徳編』  
廣済堂あかつき, p.20.
- 文部科学省 (2018d) 『中学校学習指導要領  
(平成29年告示) 解説 特別の教科 道徳編』  
教育出版, p.17.
- 12 目黒恒夫 (2005) 「道徳的な問題を考える」  
山崎英則・加藤幸夫編『心の教育の本質を学  
ぶ一人間のこれから生き方を求めてー』学  
術図書, pp.18-35.
- 13 柴野昌山編著 (1995) 『しつけの社会学 社  
会化と社会統制』世界思想社, p.6.
- 14 文部科学省 (2018c) 『小学校学習指導要領  
(平成29年告示) 解説 特別の教科道徳編』廣  
済堂あかつき, pp.5-9.
- 15 有地亨 (2000) 『日本人のしつけ—家庭教育  
と学校教育の変遷と交錯ー』法律文化社,  
pp.173-174.
- 16 木崎ちのぶ (2019) 「学校の道徳教育に対する  
保護者の意識と課題に関する一考察」『人  
間教育と福祉』日本教育福祉学会, 8, pp.31  
-40.
- 17 小此木啓吾 (2001) 『ドゥーイング・ファミ  
リーファミ愛をどう取り戻すか』PHP研究所,  
pp.233-238. (※血縁の家族を超えたつなが  
りで子育てを行うネットワークを提唱してい  
る)

## 付記

本研究の調査にご協力くださいました小・中学  
生保護者の皆様、井上文敏先生をはじめとする学  
校関係の皆様に心より感謝申し上げます。また、  
本論文の作成にあたり、ご指導を賜りました押谷  
由夫名誉教授（昭和女子大学）、藤島喜嗣教授  
(昭和女子大学大学院)に深く感謝申し上げます。

なお本研究は、昭和女子大学研究奨励補助金を  
受けた研究成果の一部となります。